

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	久遠の國家：雜録
Author(s)	崑崙子
Citation	龍南會雜誌, 106: 48-54
Issue date	1904-05-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5704
Right	

久遠の國家

四十八

崑崙 崙 子

猶太が野邊の陋色あせて、無限森渺の潮の彼方に、落暉其の影を潛む時、ゴルゴタの邊千古の偉人が久遠の微笑を嘲罵せしロムルスが國人は、南デザルトの纖月に征陣の秋水を氷らせ、西リベリヤの海風に悍馬の鬣毛を漂はせては、タイベルの丘の上永遠の帝國を夢みぬ、さあれ運命彼等が上に笑みしも暫し、憂々たる劔槊介馬の響、一度び肅寂たる北歐の鬱林に亂れて、史家の所謂『人類最樂の時代』は杳として一瞬の幻夢と消ぬ、暗暝叱咤すれば全歐の風雲爲めに擾亂し、歐西の天地愴然として震悚せしシヤレマンが雄圖も、鞆々たる時空の流れの中に失せて亦訪ふべくもあらず、且夫れ雲淨うして妖星落ち、邊聲胡笛を亂る天山の南、朔風戎衣を捲いて雄劍動くや、殷々たる百萬の碧蹄ライブニツの曠野に狂ひ、旺然として世界の半を掩ひしモンゴルスが帝國の水泡の末路を視ずや。

觀じ來れば興亡起伏は人類社會の常勢か、さなり國倒れて國復興り、遷變移動盛衰興廢は人類の常態なり、舊苑荒臺の歎を誘くもの、何ぞ獨りタイベルの城趾金陵の月のみならんや、生民以來の歴史の葉々を翻して、人類已往の點跡を辿れば、皆是れ個人國家の生と死との文字にあらずや、然らば則大聖釋迦か諸行常無してふ大聲疾呼は、是れ萬有を包括する絶對の聲か、若し夫れ眞理ならば、久遠の國家を理想するは、鹽を投じて大江の水を暖ぎ興薪を積んで安房の猛燭を防ぐの類にして愚是より大なるはなけん。

然れども大覺聖者の聲は常に人生の希望なり、人類前途の光明なり、其の幽玄の奥意は以て人類を激し、國家を勵して、遠く理想の天地に翹望せしむ、夫れ人の世に華なるはこの聲の曲解なるかな、無常の相は萬有の現象のみ、形体のみ、形体現象以上に超然たる萬有の心靈は、展轉せる現世の裡に一度無待の眞理に反響して、茲に永遠の實在を認むるなり、昨日は皎月流雲亭々たる塵表の姿、今日は青苔冷土の下、人をして千行斷腸の悲惜に泣かしむるものは人世の常態なり、流轉の顯相なり、さあれ渾身の熱血に生き、宇宙を翹望する高遠の理想に動きし已往幾多の偉人が、光榮有り彩華有る生命の靈火に擁せられて、永遠に活けるを視すや、彼の詩人ロングフェローが『人生の詩』に於て謳ひし所當に人生の力と云ふべし、彼は謳へり。

Life is real! Life is earnest!

And the grave is not its goal;

“Dust thou art, to dust returnest”

Was not spoken of the soul.

然り神の攝理は人生をして心靈の永遠的存在を具体せしむ、『求めよ然らば與へられん』是れ人生秘奥の極致にはあらずや、然り而して此の聲は獨り個人の靈覺に對する天の叫びにあらず、國家が永遠の生に到達する所以の道亦眞に存して茲に在り、永遠に醒むるものは永遠に活くるものなり、國家永遠に覺醒せば是れ永遠の國家なり、ナザレの聖者は訓へすや、『靈によりて生れずば、神の國に入る能はず』と、神の國は即永劫の常住なり、されば國家亦靈によりこ生れずば其の生存は早晚遂

に否定せられざるべからず、視ずや羅馬の如く、蒙古の如く、更には希臘の如く、肉と血とのみよりて活ける國家、何ぞ運命の破滅の斧に逆ふの力弱きや。

覺醒は常に先覺の叫びの子なり、現世を痛罵する不平者の聲の子なり、現世に晏如たるものは、昂々たる前路の光明を認識せざるが故なり、されば淡月無極の廣漠に懸り、玉露瀼々として鶉衣の袂を潤す邊、寂莫を友として耳を先天内容の囁に傾け、過去を追想して現世を觀じ、遠く未然の理想を翹望すれば、現世は遂に痛罵の種のみ、傷心の事のみ、されば愛の血に漲り、力の火に燃ゆる人々の胸、一度此の幾微にふれて、冷罵熱叫の聲は幾度か國民の惰眠を驚破し、現世の外に生動の對象を認めしめ、青史の上照々として人生の力を示すもの夫れ幾何ぞ、されば國家の覺醒は、以て現世を罵る豫言的偉人の出顯を須たざるべからず、實に偉人は國家の生命なり、視ずやアラビヤの民を、茫々たる砂塵の曠野を漂浪せる懶慢遊牧の族にして、メデナの聖者が劍を提げ、ユーランを擽げて、渾身の熱誠を以て嚴乎たるアラアの神命を獅子吼するや、デザルトの牧民は茲に世界の民となりクレツセントは世界の大勢を睥睨するの表章となりぬ、さればカーライルは言はずや。

The Great Man was always as lightning out of Heaven;

the rest of men waited for him like fuel,

and then they too would flame.

されど彼が國も遂に滅びぬ、運命の破壊の斧は永劫に半月の旗を亡ぼしぬ、是何の故ぞアラアの神命は未だ現世の聲なればなりメデナの聖者未だ人の子の姿なればなり、嗚呼永劫の國夢みむもの更

に偉大なる愛の力を認めや。

觀來り觀去れば、世界古今の偉人亦現幻の國家を悠久の時空の中に架せしのみ、然らば則國家が永遠に活きむ生動の靈火、是れを那邊に求めんとするぞ、いざ一卷の聖書を披きてカルバリ―の悲劇を讀め、鬱勃たる發展の血、永遠の勝捷の力は、炳然として偉人が肉體的臨終の間に輝けるにあらずや、實に快心の極なるは此の偉人が短かき生涯なるかな、彼は宇宙善美の体现にして現世の人にあらず、彼が過去は悠久の過去にして、未來は無極の未來なり、嗟歎心なき人の子、此の偉人を戮して、空しくエイベルの丘上斷礎殘壁となりて後人の鑑となり、後人亦心無うして、永へに展轉の波に漂浪す、夫れ國家が永遠の生に入るの門、是れをにおいて何の處にか求めむや。

更に懷ふ大聖悉達が生涯を、玄々の妙理炎々の慈悲、靈山の會散じて幾千載なるも、猶人生の力なり、宇宙絶對の眞理、善美の極致は、先に天竺の聖者に体现せられ、後に基督の身に顯はれしにあらずや、時空の隔離如何に大なると、是れ常住眞理の現前のみ、然れば則彼によりて以て永劫に活くべく、此によりて以て永劫に捷つべし、是れ天の聲なればなり。

今天孫人種の已往の歴史を見るに蠢々たる惰民の記錄のみ、幾度か鷄林の風雲を蹴りしも、是れ無意義なる暴力が、三寸の海波を隔てゝ動きしのみ、未だ理想ある國民の發展にあらず、東海粟散の國に閉居せし小國民、多くは安逸なる桃源の夢に耽り、所謂文化隆盛の時代に於ては、上下を舉げて華月に托して柔軟なる戀を語り、更には三百年の鎖國となり、祖先の追懷は遂に大和民族の腦裡より凋萎し去んぬ、祖先の追懷とは何ぞや、吾が國民發展の力なり、天職の自覺なり、永遠の國家

を翹望せしむる所以の動機なり、今遠く宗祖の昔を追へ、弦月波に碎くるスマトラの海、一葉の扁舟黒潮に棹しては、朝に仰ぐ富嶽皓々の雪、南崑崙の珠を貫きては、北北海の濱に懸く、綿津海遠く隔てゝは、常つ世の國將た何處ぞ、嗚呼是れ大和民族の祖先が最も樂みし所にあらずや、思を薩南の一角にはすれば、亞州の天地舉て東に向ふの感あり。

今夫れ旺然として發展の危機にある吾が民族、宗祖の遺跡を懷うて、義務的觀念の下に、奮然として蹶起せんか、さあれ此の力は未だ國民覺醒の力にあらず、勃々炎々として内に衝動する、永遠的靈覺の力にあらず、視よ天孫人種五千万の有衆は、未だ迷へる野の羊なり、老いたる者は石を擁して珠と喜び、若きものは亦珠を求めて石を得たり、偃々たる惑ひの子、相集ひて大厦を建つるも、其の礎砂なるを如何せん、遂に復羅馬の轍を踏まんのみ。

吾は餘りに戰勝の聲に飽きたり、戰捷に叫ばんより、現世を痛罵し、惑ひの子を醒す、狂熱の偉人を呼ばん、大なる覺醒によりて大なる發展を見んとする民族にとりて、最も孽なるは世の所謂常識主義なり、彼は平凡を意味するものなればなり、今起て狂熱の偉人を求むるには帝國の宗教界は餘りに平凡なり、更に佛者に至りては單に亡國の民の面影を見るのみ、吾が筐底に左の短篇有り、吾人が今の佛者に對する感想の一端を漏せしものなり。

北邱の歎茶毘の悲觀は人生敗亡の聲なり、亡國の恨亦何ぞ杜牧が後庭の華のみならんや、夢魂一宵味爽の翼を掖みて、昂々として南崑崙の巔に淡影を投ぐれば、チベットの野邊ガンヂスガ河、垂蹄の月碎く錫蘭の波、轉た運命の秘奧を語るごと切に、慨然として志士の雄魂を激發するもの

多し。

嗟歎心なき人の子、久遠の力を謬りて自ら流轉の相を顯じ、永劫の生を棄てて永劫の死に入る、聖者佛陀の本願安ぞ茲に在らんや、凡そ万有の現象は生滅輪轉の無常界なり、而も此の展轉變化の裏に無上超越の常住界有り、是れ宇宙善美の極にして人生の大なる力實に茲に存せり、是に到達して『吾人の過去は久遠の過去となり、吾人の未來は久遠の未來となり』潑刺たる人生活動の源泉は、滾々として湧き滔々として流れ、宏博無涯の理想の海に洶涌たる濤瀾と亂れん。

夫れ宗教家の天職は、人類の先天内容の聲を聴き、宇宙の奧意玄々の秘を發き、人生存在の所以を闡明し、人類をして輪廻流轉の現實界以上に更に光明ある永世不渴の泉に掬せしむるに在り、然るに今の佛者流、此天職を自覺するには其品性餘りに下劣なり、其の理想餘りに乞食的なり、社會の最下層たる無爲徒食の一階級は、僧侶と寒乞兒とによりて形成せらるゝの觀あるは是れ帝國の現狀にはあらずや、嗟歎蠢爾として動く佛者流、汝が膚上の緩羅は老癢鈍愚の輩をして姪樂徒食の資を喜捨せしむるに足らんも、世道人心の腐敗汝に極まるを知らずや、汝が理想の何處にか佛陀迦耶の聖者が高崇偉大なるその面影を留むるものぞ、且夫れ山水の間草庵の中泊焉として社會を離隔し、晏如として個性の安慰に笑める佛者、何ぞ夫れ迷妄の大なるや、彼が生存は無意義なり、佛陀の奧意を謬る亡國の民は即彼なり、釋迦の慈悲は社會の對象を得て、善美の極なる永遠の眞理として活さしにはあらずや。

觀じ來れば滔々たる佛者流、迷妄に非ずば則熾然たる徒食の輩、亡國の民たるに適するのみ、孤

星炳々として富嶽の東に顯はる、人生前途の導への星かと渴仰すれば、彼も亦學究齷齪の徒と成り終んぬ、高遠雄偉の人格と温々たる無限の愛とに充てる大聖に於て、人生々動の信念と力とを認むる我は、遙に安房東條が濱の偉人連長が古の狂熱を追懷するのみ。

さあれ待て暫し、無極の理想の園に趨り行かんず我が魂よ！、なれが行く手は餘りに高し、なれが翼のよし強くとも、万斛韃々の現世の流に逆らはんや、いざや來れ、此の流のまに／＼漂ひて、なれど俱に安らけき夢結ばんものを。是れ世の人の子の聲なり。

永世の鍵^きを手にして漫然として座し、熙々として現世を樂めるは今の宗教家なり、其の鍵以て汝が永生の門戸を開き、其の力以て天孫人種の未來を悠久にするを知らずや、思を宗祖の古へにはせ、復活の曙光東天を射て、赫々たる朝暾の兆を示すを見る時、永遠の國家を想ふて宗教的偉人が千古痛快の生涯を追へば、運命の斧の音彌高く耳底に響き、勝捷の聲も亡國の餘韻あり、大和民族をして茲に永遠に醒さむものは、當に萬道の噴火の炎々として大天を照破するの概ある、宗教的狂熱の偉人たらざるべからず、冷頭平心悠揚迫らずてふ學究的人物は、發展の閫に立てる民族の覺醒者にあらず、夫れ偃々たる野邊の羊に導への光與ふるものは誰ぞ、嗚呼基督釋迦の靈光は國家が悠久存在の力なり、大なる發展の信念なり、此の信念を絶叫する狂熱の人何の邊にか求めん。

Belief is great, live-giving. The history of a Nation becomes fruitful, soul-elevating, great,
so soon as it believes.